

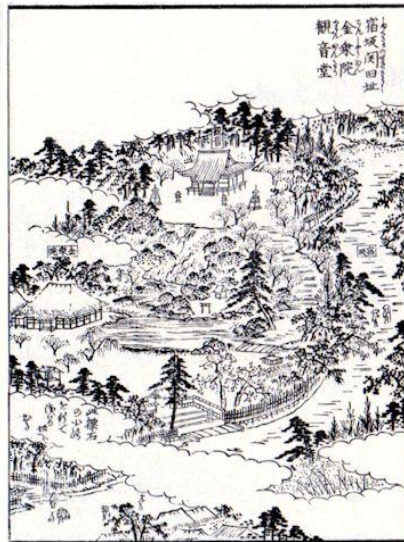
「地図豆」の地図を広げて街歩き

## 9-1 目白の坂を上り下りしながら泉を探す（距離約 10.0km）

### 【街歩きの概要】

東京の新宿区下落合から江戸川橋までの神田川の北には多くの坂道があって、それは神田川が作りだした浸食崖を上下する道である。ごく普通に考えて、坂道があるということは等高線が込み合った斜面になり、斜面下には泉や湧水の存在が予想される。

その崖地にある坂道をたどりながら、泉探し、街歩きを楽しむことにする。



江戸名所図会の「宿坂」

### 【道順】

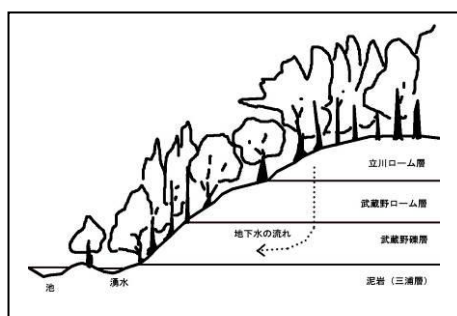
目白駅から目白崖線→血洗池（湧水？）→おとめ山公園（湧水）→のぞき坂→宿坂→金乗院→南蔵院→氷川神社→面影橋→甘泉園（湧水）と高田富士→稻荷坂・富士見坂・日無坂→清戸道→清戸道→新江戸川公園（湧水？）→幽霊坂→永青文庫→胸突坂→芭蕉庵（湧水）→椿山荘湧水（「古香井」）→大洗堰（江戸川公園）→都電早稲田駅 or 新江戸川橋駅

## ルートマップ



### 地図豆知識：崖地の自然

関東平野では、基盤となる地層の上に関東ローム層と呼ばれる富士山や箱根火山の火山灰が堆積していて、基盤（礫や粘土層）は水分を含んでいる。したがって、ショートケーキの切り口のように粘土層などがむき出しになった浸食崖のちょっとした谷間からは、浸み出す湧き水や泉が見られる。



一方で、こうした浸食崖の地形は日本各地どこにもあって、豪雨による崖崩れなどの災害被害を受けやすい場所である。したがって、従来周辺住民は地域を災害から守るために、崖地の開発を出来るだけ遅らせてきた。崖の上下には住宅地が広がっても、その狭間になった傾斜地には鬱蒼とした常緑広葉樹林が残されてきたのである。

ところが、東京のような大都会では、こうした

地域にも開発の手が入っている。それでも一万分の一の地形図をよく見ると、込みあった等高線の連なりの中に、森林地を示す緑色の塊を随所に発見できる。

こうした神田川の北に広がる崖地の自然は、現在どのようになっているだろうか、湧水はどの程度残っているだろうか、併せて、河川浸食によって作られた崖がどれほどのものかを、あくまでも坂道を上下しながら体験してみる。

おおむね以下の順にめぐって、神田川が武蔵野台地を侵食した崖（目白の坂を）を上下して、泉探しをする。



むかしは、こうした「泉」の地図記号が用意されたこともあったが、現在の地図には無い

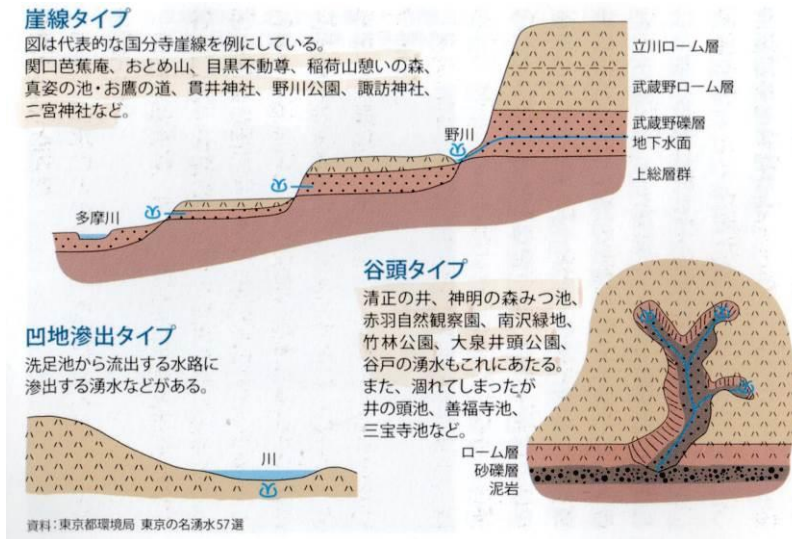
#### 地図豆知識:湧水

湧水は、以下のようなタイプに分類される。街歩きの際には、それぞれの湧水がどのタイプのものか観察してみるといい。

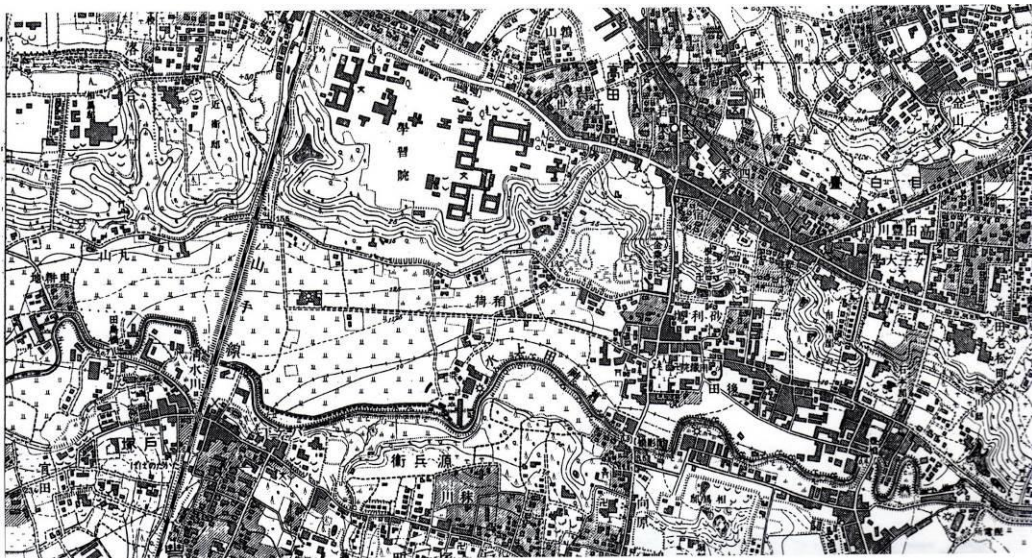
・崖線タイプ:川によって浸食された台地の段丘崖や断層面に露出した砂礫層から湧くもの。砂礫層の下部は水を透しにくい粘土層や泥岩になっていることが多い。湧水を供給するかん養域はごく狭い範囲である。

・谷頭タイプ:台地上の馬蹄型や凹地形などをした谷頭(台地面の谷の奥)の地形的に水を含む層が露出したところから湧くもの。地下水が湧水する力で谷頭地形が形成されることが多く、かん養域はごく広い範囲である。

・凹地しみだしタイプ:川床や凹地に地下水や伏流水が圧力でしみだしてできる湧水。かん養域は地下水や伏流水に関連した広い範囲である。

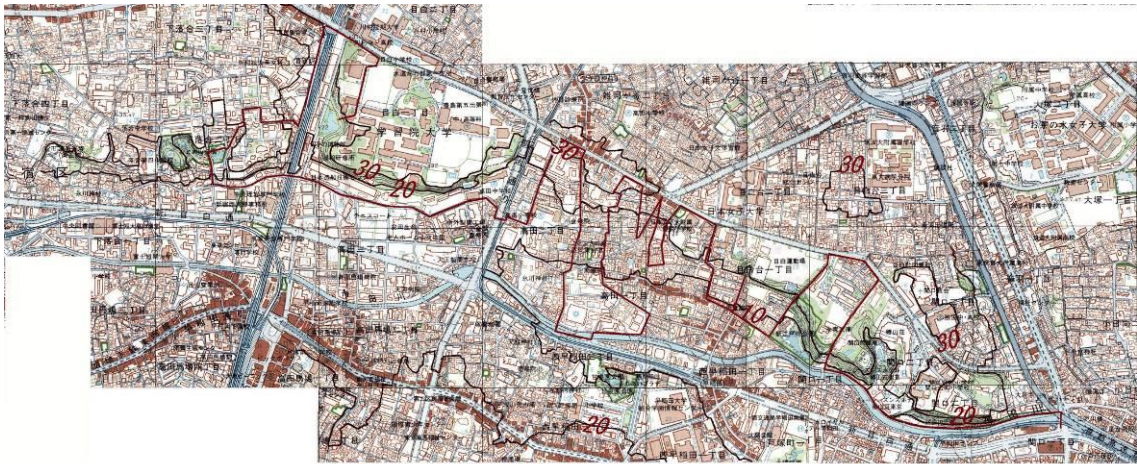


湧水の分類(東京都環境局「東京の名水 57 泉」から)



1/10,000 地形図「目白」(M42 測図)

崖地には森林が残り、低地には水田が広がるようすが、  
 そして崖地の下部には池があって、崖線タイプの湧水の存在を予想させる



主な等高線とルートを表示した 1/10,000「新宿」(H5 修正)  
 開発されて森が少なくなっているが、残されているのは崖地が多い  
 神田川は直線的に改修されているが、その痕跡を行政の界として見ることができるから、  
 これをたどる歩きも興味深い



デジタル標高地形図

等高線が読めない人にも谷や尾根が明らかになるだろう

### 【街歩き解説】

#### ①目白駅から目白崖線

目白崖線とは、武蔵野台地が神田川に面する学習院キャンパスの南西角から、音羽通りまでの崖をいう。等高線の出入りはそれほどないが、崖面には大小の坂道があり、随所に湧水があるのが特徴である。明治期の1万分の1地形図や迅速測図といった地図を広げれば、そこには大小の池があつて、湧水・泉の存在が予想できる。

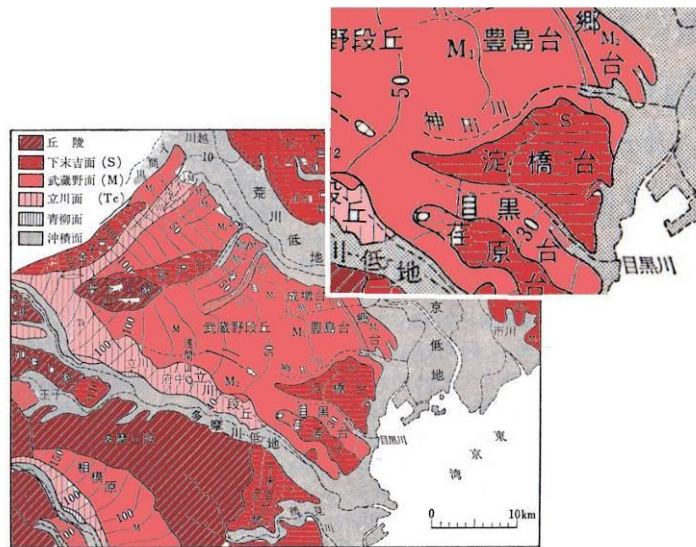


図 3-11 武蔵野付近の地形面区分と谷を埋めた等高線(間隔 10 m) (貝塚・戸谷, 1953に加筆)  
 M<sub>1</sub>, M<sub>2</sub>, M<sub>3</sub> の区分は杉原重夫ほか (1972) による。

### 武蔵野附近の地形区分

下図中央の朱系統に彩色された部分が武蔵野台地



空中写真 (1948)

戦災による被害もあるが、未だ空き地や耕作地がみえる



空中写真（1963）

開発が進んで耕作地や空き地は、ほとんど無い

## ②血洗いの池

学習院大学キャンパスには「血洗いの池」と呼ばれる池がある。堀部安兵衛が高田馬場で助太刀した帰り、この池で刀を洗ったという言い伝えがある。

キャンパス内の目白の崖の西端の位置に、江戸時代は富士を眺める名所として、四季折々、当時の文化人が集い遊んだ富士見茶屋跡がある。かつては、眼下に、神田川と妙正寺川（現JR山手線の西で神田川に合流）、落合たんぼ、その先に富士山が見えたはずだ。芭蕉の句碑には、「目にかゝる時や殊更五月富士」とある。



血洗いの池と乃木館



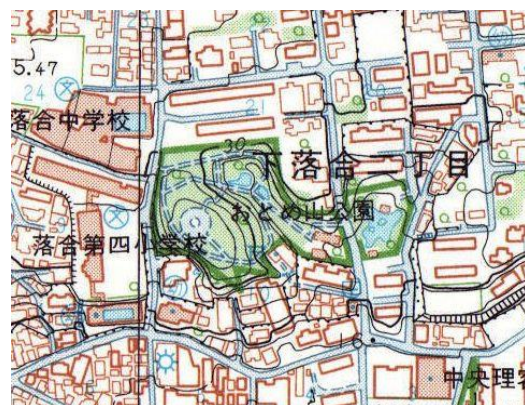
学習院 血洗池 (1/10,000「新宿」(H5) 以下同じ)

③おとめ山公園 (湧水口)

おとめ山公園は、江戸幕府將軍家の直轄する狩猟場であった「御留山」が、近衛邸や相馬邸などのお屋敷となり、その後公園になったもの。おとめ山公園内の東西の谷で湧水が確認できる。



明治期のおとめ山 (1/10,000 地形図「目白」(M42) 以下同じ)





## 現在のおとめ山公園



おとめ山公園西の谷湧水（左）と東の谷湧水（右）

### ④のぞき坂

のぞき坂は、車道では都内一の急坂だそうで、初めて見る者は驚きの声を上げるだろう。明治通りを切り通す際に切り崩された坂が、「のぞき坂」だったので、その名前を引き継いだともいわれる。私が写真から推定したところでは、13%ほどの傾斜がある。そのほかは、宿坂（6度）、稲荷坂（10度）、富士見坂（10度）、日無坂（9度）、小布施坂（8度）、豊坂（8度）などを上下しながら進む。



のぞき坂



宿坂

### ⑤宿坂

かつて、宿坂の関と呼ばれる関所が鎌倉街道にあって、街道はこれを上って、鬼子母神方向へ向かっている。のぞき坂の新しく開削されたものだから直線的である、それに比べて宿坂のうねった形は歴史を感じさせる。

### ⑥金乗院

金乗院境内には、由比正雪の乱でおなじみの槍の名人丸橋忠弥や、青柳文庫の創設者、青柳文蔵の墓がある。金乗院境内にある宿坂に面した建物が目白不動堂である。

ちなみに五色不動の場所は、目黒不動 - 瀧泉寺（東京都目黒区下目黒）/目白不動 - 金乗院（東京都豊島区高田）/目赤不動 - 南谷寺（東京都文京区本駒込）/目青不動 - 教学院（東京都世田谷区太子堂）/目黄不動 - 永久寺（東京都台東区三ノ輪）/目黄不動 - 最勝寺（東京都江戸川区平井）とか。

近くにある根上院は、寛永年間創立の徳川幕府の祈願所という由緒であるが、以前には湯島の切通坂にあり明治36年（1903年）に当地に移転してきたという。戦災によって本堂などは焼失し、残ったのは特徴的な赤門だけ。赤門前に道しるべがあり、「藤稻荷大明神」「道乃里六丁」と読める。



根生院

### ⑦南蔵院

南蔵院は、江戸名所図会（1834）にも描かれ、徳川家光も訪れ、相撲年寄りの墓などがある。ここを南北に通る道筋は、旧鎌倉街道であって、現在もほぼ当時のままの形状を残している。付近の溜池や神田川本流から取水した灌漑用の用水路が南蔵院の北を東西に流れていたという。道路として形を残している（明治42年図）。



南蔵院「江戸名所図絵」



南蔵院辺り

中央を南北に通るのが旧鎌倉街道である

寺社の名称とともに「砂利場」や「小布施邸」などの文字が見える



南蔵院辺り

旧鎌倉街道がほぼそのままの形で残っていることがわかる

### ⑧氷川神社

氷川神社のごく小さな神橋の欄干には、江戸時代に近くにあった高田砂利場と四ツ家下町といった町名や明治十丁丑年（1877年）の日付が、手水鉢手前の石標には砂利場、砂楽連と寄贈者の氏名が刻まれている。このあたり、明治時代には砂利場が方々にあって地名にもなっていた。それは、かつての荒川か入間川の河川堆積物が浅海に堆積したものといわれ、その砂礫層を採掘していた。

氷川神社の向い、やや北側に南蔵院がある。付近の溜池や神田川本流から取水した灌漑用の用水路が南蔵院北を東西に流れていたという。



## 氷川神社の石標と山吹の里碑



富田染工芸

### ⑨面影橋（姿見橋）

現在神田川に架かるのは「面影橋」と呼ばれている。明治20年（1887）、内務省地理局の発行した「東京実測図」で、ここに「面影橋」と記されてから、一貫して「面影橋」となっているが、それ以前は、姿見橋とも、やや北にあった小橋と関連して位置が異なることもあった。橋の北たもとには、太田道灌で知られる山吹の里碑が、そこを東へ進むと「東京染小紋」や「江戸更紗」の伝統と技を継承していることで知られる「富田染工芸」がある。

### ⑩甘泉園（湧水）と高田富士

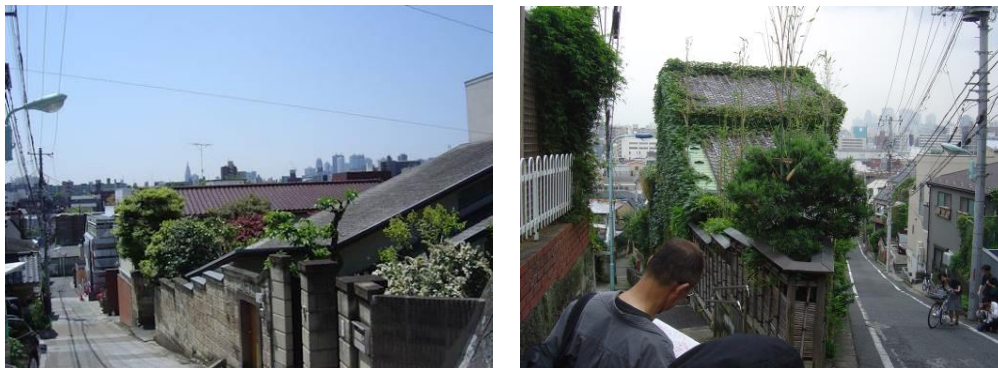
かつての大名下屋敷であった甘泉園は、目白の崖の対極にあつて、ここにも泉がある。さらに水稻荷神社のむこうには高田富士もあるが、一般開放日は限られている（地図には表現されていない）。



甘泉園（左）とその泉

#### ⑪ 稲荷坂・富士見坂・日無坂

富士見坂と日無坂の三角形になった分岐点には、つたのある特徴的な家が独特の風景を見せている。さらに、明治時代、株式の仲介で財をなした小布施新三郎という人の屋敷があった小布施坂、坂下にある豊川稲荷から名づけられたという豊坂もある。



稲荷坂と、富士見坂（左）と日無坂（右）

#### ⑫ 清戸道

一旦、清戸道（目白通り）へ出る。目白台上の目白通りの先にあった中清戸（現清瀬市内）に、御鷹場御殿があり、将軍が鷹狩に通うこの道を清戸道（坂）と呼んだという。

#### ⑬ 新江戸川公園（湧水）

崖の起伏を利用した細川家下屋敷の大名庭園を昭和34年（1959）に都が取得して、新江戸川公園とした。崖の斜面に湧き出す水があり、これは塀を隔てた私立学校の庭から湧き出している。この周辺が神田上水の水源にあたる。



新江戸川公園湧水と新江戸川公園庭園

#### ⑭ 幽霊坂

コンクリートに挟まれた幽霊坂は、昼なお暗い。



幽霊坂と胸付坂



永青文庫

⑮永青文庫

細川家の屋敷跡に位置する森が美しい永青文庫は、細川家に伝来する歴史資料や美術品等の文化財を保存・研究し、一般にも公開している。道を挟んだ向かい側には、明治時代の宮内大臣田中光顕の蕉雨園（非公開）そして講談社野間記念館がある。

⑯胸突坂

芭蕉庵と水神社に挟まれているのが、胸突坂だ。その名のとおり、かなりの急坂で、坂の途中には2本の銀杏が素晴らしい、神田上水の守り神、水神社がある。

⑰芭蕉庵

松尾芭蕉が日本橋から深川に移る前に、当地で神田上水にかかわったといわれる（1680）。そのころはまだ俳諧師として生活できるほどの実績が無かったので、神田上水の浚渫作業を請負、数百人の人夫を使用してこの地で工事にあたったといわれる。邸内に石鉢に落ちる湧水がある。



芭蕉庵とその泉

⑩ 椿山荘湧水

江戸時代、ツバキの自生する景勝の地として知られた椿山（つばきやま）で、山縣有朋の別邸でもあった「椿山荘」には、「古香井（ここせい）」という湧水がある。これは、古くから東京の名水に数えられた由緒あるもので、湧水秩父山系からの地下水が湧き出されているのだという。



10,000 地形図 (M42 と H6)





「古香井」と「椿山荘」

⑱大洗堰（江戸川公園）・新江戸川橋駅

大洗堰は、井の頭池を源流とする神田上水が、この地にあった大洗堰で水位を上げて、（現後樂園にあった）水戸屋敷へと分水したという。そのようすは「江戸名所図会」にある。そして、江戸川公園の崖からも自然のしみだしがあるが、それは少量だ。



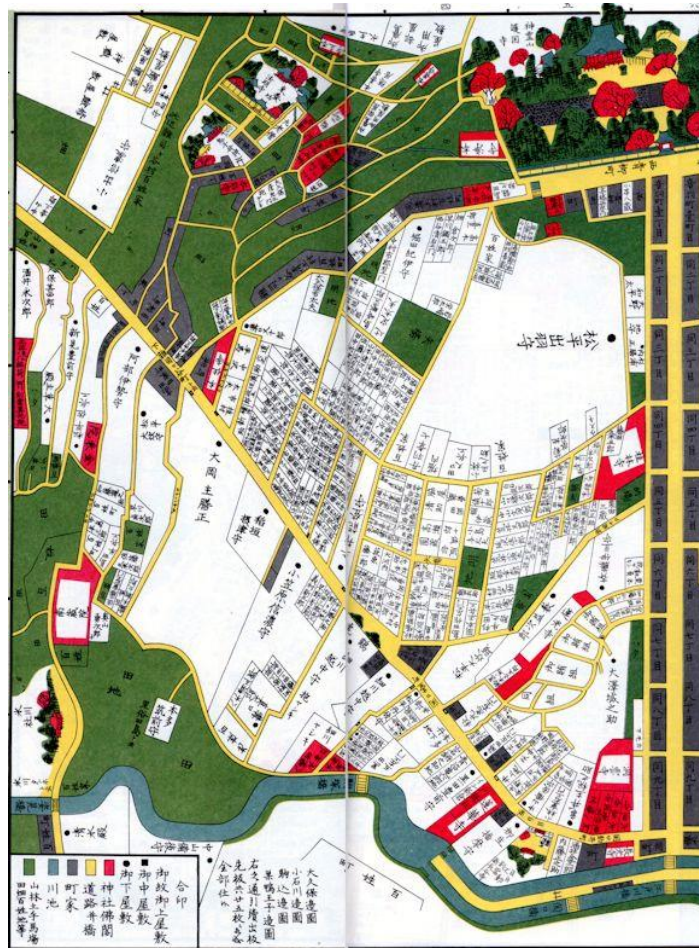
大洗堰（「江戸名所図会」）



すっかりコンクリートで固められた神田川  
それでも桜の季節には花見客であふれる

都心にも関わらず、思いのほか緑に出会うことができた道歩きは、東京メトロ江戸川橋駅あるいは都電早稲田駅などで終わる。

こうした街歩きをさらに興味深いものにするなら、それぞれの興味の範囲で、国土地理院が過去に発行した旧版地図や空中写真、江戸切絵図などの古地図類、さらには江戸名所図会などを手にすると、さらなる発見があるかもしれない。



「雑司ヶ谷音羽絵図」(「江戸切絵図」(1857))

「江戸切絵図」を現在の地図や風景と重ね合わせるのには、少々技術が必要になるだろう。

## 9-2 目白の坂を上り下りしながら泉を探す (距離約 10.0km)

更に東へと足をのばして、西武新宿線下落合駅から始めると以下ようになる。

### 【道順】

西武新宿線下落合駅→氷川神社→薬王院→野鳥の森公園→おとめ山公園(湧水)→明治通り→(学習院)血洗池→(学習院)富士見茶屋→のぞき坂→宿坂→金乗院→南蔵院→日枝神社→面影橋→目白通り(旧清戸道)→富士見坂→日無坂→小布施坂→豊坂→(不明坂)→新江戸川公園(湧水?)→幽霊坂→永青文庫→胸突坂→水神社→芭蕉庵(湧水)→椿山荘湧水→大洗堰(江戸川公園)→目白坂(旧清戸道)→都電早稲田 or 新江戸川橋駅

\*\*\*\* オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu \*\*\*\*